

今後の作業予定

現況再現が確認された水質モデルを用い、水質汚濁メカニズムの解明を行うものとする。

モデルを用いることによって、水平方向・鉛直方向の物質量の分布（濃度分布図、鉛直プロファイル）や時系列的な変化図など、サンプリング結果では得られない結果を示すことができる。

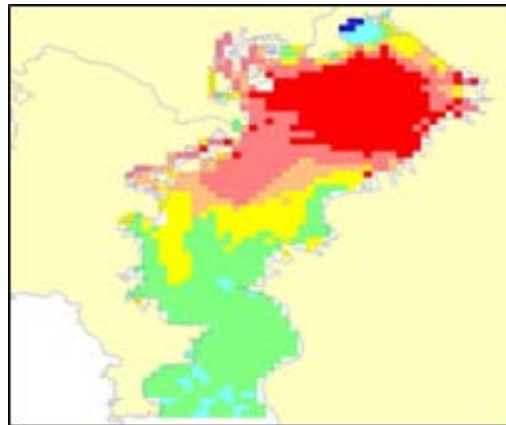


図10-1 濃度分布図の例

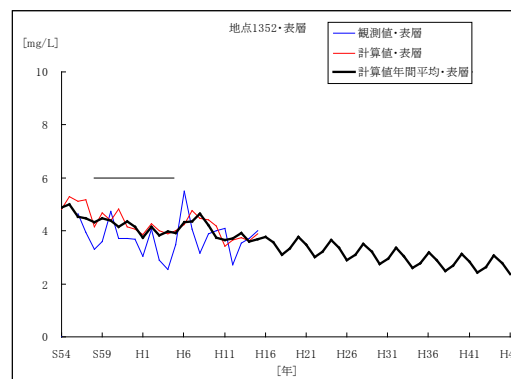


図10-2 時系列図の例

「第6次水質総量規制の在り方について(答申)」(平成17年5月:中央環境審議会)においては、東京湾を対象として行った水質予測シミュレーションの結果を参考として、以下の7つの項目について要点を取りまとめている。

- ①汚濁負荷量と水質濃度の関係
- ②有機物の内部生産
- ③底泥からの溶出
- ④干潟における水質浄化
- ⑤漁獲による海域からの窒素及びりんの回収
- ⑥流入河川の影響
- ⑦外海のCODの推移

これらの要因については、東京湾をモデル地域として各境界面からのフラックス（COD、T-N、T-P）や内部生産量の推移等を把握することにより、海域の水質汚濁要因を分析するものとする。対象として考えているフラックスは表10-1に示したとおりである。また、水塊内の現存量の推移を把握・整理するものとする。これにより、それぞれのフラックスによる寄与率を推計することができ、水質汚濁メカニズム・水質改善のメカニズムの解明に繋げることが可能になる。

表10-1 対象とするフラックス

区分	内容
流入・供給等	①底質からの供給
	②陸域からの負荷
	③湾口からの流入
	④大気からの供給
流出・除去等	①底質への沈降
	②自然浄化
	③湾口より流出
	④大気への放出

このように得られたフラックス、現存量は、図10-3・図10-4のような例に従い、とりまとめを行う。また、湾内の流れや水質等の特性を加味し、湾全体の量を把握するほか、東京湾を[湾口～湾中部、湾奥部]にブロック化するなどして、必要に応じ細分化して検討する予定である。

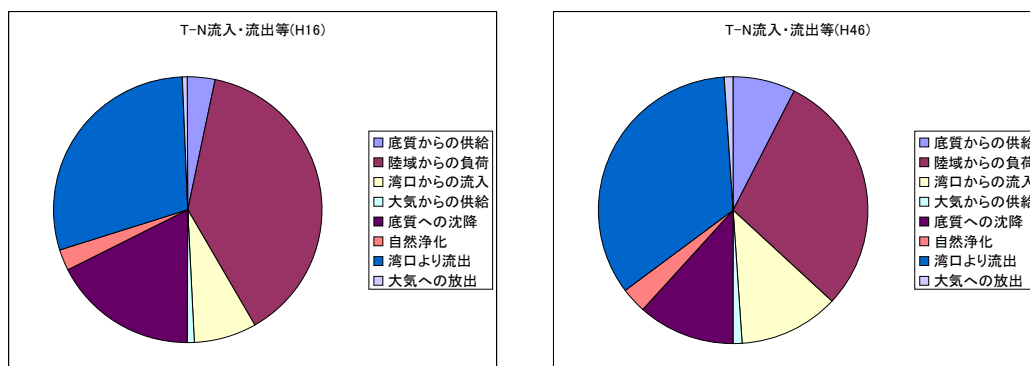


図10-3 フラックスの整理例

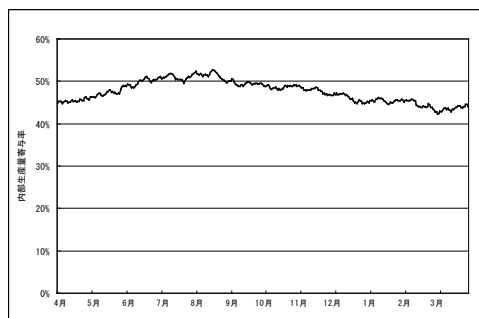


図10-4 内部生産量割合の整理例